

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	龍門文庫蔵『公事根源抄』江戸初期写本 翻刻 巻中
Author(s)	佐々木, 勇; 広島大学日本語史研究会,
Citation	論叢 国語教育学 , 17 : 65 - 83
Issue Date	2021-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/51114
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051114
Right	
Relation	



龍門文庫蔵『公事根源抄』江戸初期写本 翻刻 卷中

広島大学 日本語史研究会

一、龍門文庫蔵『公事根源抄』の翻刻

前号に続き、阪本龍門文庫蔵『公事根源抄』を翻刻する。書誌その他は、本誌前々号をご覧頂きたい。

今回は、巻中全体の翻刻を公表する。

- 本翻刻は、小野若菜・土肥新一郎・山口倫香・石田芽衣・稲熊詩帆
- ・黒木裕梨香・館林佑樹で作成し、佐々木勇が確認・修正した。

(以上、佐々木勇)

〈凡例〉

一、本翻刻は、龍門文庫『公事根源抄』(龍門文庫 二〇八) 原本に基づき、その全体を、現行の字体に改めたものである。仮名遣いは、原本のままとした。

一、本資料の振り仮名は、「つ」と「ッ」(舌内入声音と促音)とを、原則として使い分けている。そのため、本翻刻でも、両者を区別した。

一、本資料の濁点は、「・」と「..」とがある。何らかの使い分けがある可能性は存するものの、翻刻ではこの両者を区別していない。

一、翻刻にあたり、原本丁数表(オ)裏(ウ)ごとに行数を付し、必要と思われる注を、当該箇所「」に入れて記した。

一、原本閲覧ならびに翻刻の御許可を賜わった阪本龍門文庫に対し、

心中より御礼申しあげる。

二、翻刻

(中 一オ)

1 三月

2 御燈 三日

3 是天子の北斗にとうみやうを奉り給ふ也むか

4 しは北山靈岩寺といふ所のたかきみねにて火

5 をともして北辰に供ぜられけるよし一条院の

6 御記に見えたり延暦十五年三月にはじめ

7 てまつらるゝとて一日宮主御燈たてまつるや

8 いなやの御卜たてまつる穢氣あるよしを申

9 いまはさだまれることになりたりいと心得が

10 たしさて三日御燈を奉らさるよしの御祓

11 ある也まごびさしのはしのまに北むきに御

(中 一ウ)

1 座をしく也

2 曲水宴

同日

3 是はむかし王卿など参りて御前にて詩をつ

4 くりて講せられけるにや御溝水に盃をうかへ

5 て文人以下是をのむよし康保の御記にのせら

6 れたりまた雄略天皇元年三月上巳日清

7 苑にみゆきして曲水のよのあかりをきこ

8 しめすと日本紀にあり曲水宴は周の世

9 よりはじまりけるにや文人とも水の岸にな

10 みゐて水上より盃をながし我前をすぎさるさ

11 きに詩をつくりそのさかづきをとりてのみける也

(中 二オ)

1 羽觴を飛などいふこともこの事なるへし又上

2 巳の祓とて人みな東流の水上にてはらへ

3 するよし漢書などにするせるなり又草餅

4 を三月三日にもちゆることは周の幽王より

5 事おこりぬるよし申つたへたり

(中 二ウ・三オ、図絵)

(中 三ウ)

1 薬師寺最勝會 七日

2 天長七年よりこの寺にて毎年七ヶ日最勝王

3 經を講せらるこの寺は天武天皇の御願なり

4 石清水臨時祭 中午日

5 國忌にあたらば下のむまの日なり二月はかりに奉

6 行の藏人使 舞人を申さだむ前二日はかりに

7 試樂の事あり孫廂に御椅子をたて、出御

8 あり公卿めしによりてすのこ長はしなどにさふら

9 ふ四位五位の藏人垣下に地下に候す次に年

10 中行事のしやうじのもとにのぼりて御けし

11 きをうか、ひて沓をはきて前庭をわたりて瀧

(中 四オ)

1 口戸にて舞人をめす舞人闕腋の束帯に

2 てす、み出竹臺のもとにて竹をおりてかざ

3 しにさす仁壽殿の廊の下よりす、みて御

4 前につらなりたつ 二行 也もし半ならば 陪従

5 近衛の召人求子うたひ琴笛ひぢりきの

6 音をあはせたり舞人まひおはりてしり

7 ぞきて肩ぬぎてさらに出するが舞つねの

8 ことし終ぬれは大ひれかへしうたひてこゑた

9 えすしてまかりいづ此試樂はちか比はおこな

10 はれ侍らぬにや代のはしめにはかならず有
11 へし試樂は調樂ともいへり先音樂をと、

(中 四ウ)

1 のへこゝろむる心なり當日は御禊あり庭
2 座に舞人つく大臣以下かざしの花を舞
3 人のかふりにさす三獻もしは五獻はてゝかさ
4 ねがはらけの事あり天慶五年四月廿七日
5 にはじめて此りんじのまつりはありきは
6 将門がらんぎやくの事ありしときいのり申
7 されしに八幡大菩薩みづからかのまさかどか頸
8 をきり給けるとなんその報賽のために天
9 禄二年三月より毎年のことになり侍ると也
10 そのときのつかひははりまのかみ光明 朝臣舞
11 人歌人をのゝ十人あり

(中 五オ)

1 いのりくるやはたの宮のいはし水ゆくすゑと
2 をくつかへまつらん是はそのおりの哥になん侍
3 ける次の日はかへり立の義あり南祭は御前に
4 めさす弓場殿にて勸盃禄なとたまふ

5 鎮花祭

6 神祇官にておこなはる是は大神狹井の二
7 祭をいふと神祇令にのせたり春花のとび
8 かふ是は疫神の分散して人をなやますか
9 ゆへにかれをしつめんためにこの祭はあり
10 京官除目
11 是は三月三日よりさきにおこなはるへきことなれ

(中 五ウ)

1 と今は秋の除目とそいふめる冬にもをよぶ也
2 京にある諸司を任せらるゝゆへに京官とは申
3 なり執筆のさほう進退大かた除目におな
4 し三省奏などのかはりめにてあめり一夜
5 おこなはる二夜もつねの事なりつかさめし
6 とは此秋の除目を申なりあがためしは春の
7 なるへし
8 東大寺授戒

9 是は三年に一度あり孝謙天皇天平勝宝
10 六年に唐の鑿真和尚つくしの太宰府に
11 わたりつきしかは東大寺に戒壇をたてゝ

(中 六オ)

1 天子以下菩薩戒をうけ給きはより東大寺

- 2 の受戒といふことはしまりき大かた此伽藍
- 3 は聖武天皇の御願なりいかめしきやうなれば
- 4 くはしきことはしるすにをよはす
- (中 六ウ、空白)
- 1 (中 七オ) 四月
- 2 齋院御禊
- 3 御代のはじめには吉日をえらはる毎年には四月の中の
- 4 むまの日なり嵯峨天皇弘仁元年に皇女有智内親王
- 5 をはしめてかもの齋院にすへ給へりそれよりこのかた代との
- 6 みかど御代のはじめに皇女を齋院になし給ふ也ひめみやたち
- 7 をえらひ出して卜部うらなひさだむこれを卜定といふ卜定に
- 8 あひ給し皇女先東河にのそみ給て御祓の事ありて直に
- 9 初齋院へ入給ふこゝにて三年の潔齋おはりてそのとしの
- 10 四月に吉日をえらんで東河に出給て御祓し給ふこれを
- 11 齋院の御祓ともまたは賀茂のみあれとも申也それより紫
- 12 野の野宮にいり給てさて中のとりの日かものやしろへ
- 13 参りてまつりにあひ給ふ也

- (中 七ウ・八オ、図絵)
- 1 (中 八ウ) 更衣 一日
- 2 掃部寮所との御しやうぞくをあらたむ御殿
- 3 御帳のかたびら面生衣に胡粉にてゑをか
- 4 く壁代みな撤す夜御殿これにおなしとうろの
- 5 つる同じ物なれとあたらしきをかく置これ
- 6 に同じ茵はかはず御服は御直衣御衣生衣
- 7 綾御單 御帳袴 内蔵寮よりこれを奉る
- 8 女房衣袷衣ども更衣のひとへからきぬす、
- 9 し也裳は上臈はうす物小上臈はうす色
- 10 つねのことし
- 11 孟夏旬 同日
- (中 九オ)
- 1 是は天子夏冬の季のあらたまるはしめに臣
- 2 下に御酒をたびまつりことをきこしめす義也
- 3 およそ旬には色とあり内裏あたらしくつく
- 4 られてのちはしめて南殿にておこなひ給ふをは

- 5 新所しんじよの句と申す位くらゐにつかせ給てはじめて政まつりごとに
- 6 のぞみ給ふをは萬機ばんき句と申十一月一日冬至とうじ
- 7 にあたるとしおこなはるゝをは朔旦さくたんの句と申夏なつ
- 8 のはじめにおこなはるゝを孟夏まうかの句と申冬ふゆの
- 9 はじめをは孟冬まうとうの句と申にや此夏冬なつふゆのをは
- 10 二孟まうの句とも申也此孟夏まうかの句には二獻こんのゝち内ない
- 11 侍扇しあふぎをいれたる折箱おりはこをもちて御屏風びやうぶの南みなみの
- (中 九ウ)
- 1 はしにをきたるを出居でゐの次将じしやうとりて王卿わうけいの
- 2 座ざの前まへにつきて扇あふぎをわかち給ふ也いと興けう
- 3 ある事にこそいまは旬の義たえはて、陳ちんの
- 4 座ざにて平座ひらざをそおこなひ侍る
- 5 貢たてまつる氷こほり 同日
- 6 主氷司もんどつかさ四月一日より九月盡しんまでこれを奉
- 7 る事のおこりなと氷様ひのたまの所に申侍りぬ
- 8 大神祭おほわのまつり 上卯日
- 9 是は上卯日かみのうのひにおこなはるもし卯日うのひ三あらは中
- 10 に有へし先うしの日使ひんひたつ大原野おほらののことし

- 11 この祭冬まつりふゆはとらの日使ひんひたつそのゆへは夏なつは卯
- (中 一〇オ)
- 1 日のあかつき冬ふゆは夕よいにまつるかゆへ也是は大三おほみ
- 2 輪神わかみなり大物主おほものぬし神のかみの御事みことなり三輪みわと申
- 3 本儀ほんぎはいにしへこの大物主おほものぬし神のかみ活玉いくたま依姫よりひめといふ
- 4 女むすめのもとへしのびにかよはせ給ふ時ときしる人ひとさらに
- 5 なかりきその女むすめはいにんにをよんで父母ちち、ははうたが
- 6 ひあやしめ誰人たれひとかつねにきましけると此女ここのむすめ
- 7 にとひければ此日このひごろ人ひとのかたちしたる者家いへ
- 8 のやねより來りて我われとそひふし侍りき
- 9 とこたふ父母ちち、ははこれを見あらはさんと思ひて
- 10 布ぬのを糸いとをへにくりて針はりをつけて女むすめにか
- 11 たりて云い此度このたびかの神人しんじんのきましたらん時此
- (中 一〇ウ)
- 1 針はりをもてきたる衣きぬのすそにつけよとぞをしへ
- 2 ける女むすめかのをしへのまゝにしてつくる朝糸あしたいと
- 3 を見ればかぎの穴あなよりとをりて節渡山せだやま吉
- 4 堅山のやまをへて三諸山みつもろやまにとゞまりけりこの時はじ

- 5 めて大物主神とはしりぬべしその糸くり
 6 わげられて三わな有しかは三輪山とぞ申け
 7 るこの事旧事本紀に見をよひ侍しやうに
 8 おほえ侍るたれくも耳なれ侍ることは今さ
 9 らなるやうなれともだしがたくて一筆しる
 10 し侍るばかり也此祭は貞觀の比はじまりけ
 11 るにや
 (中 一―一オ)
 1 稲荷祭 同日
 2 此神社こんりうの縁起また祭の濫觴など所見
 3 たしかならずかの社の祢宜の説には和銅年中
 4 にはじめて伊奈利山にあらはれ給けるとかや或は
 5 弘法大師東寺の門前にて稲荷たる老翁
 6 にあひ給けるを東寺の鎮守に勸請申され
 7 たらと申説も侍る也さていなりと稲荷とか
 8 きたるとかや
 9 山科祭 上巳日
 10 この社は宮道氏の祖神也祭は寛平十年よ

- 11 りはしまる也
 (中 一―一ウ)
 1 平野祭 上申日
 2 延暦の比神社をざうりうありて貞觀に祭礼
 3 をは始行せらる上卿辨内侍むかふ近衛尉む
 4 かひて見參をとりて内に參りてそうす臨
 5 時の祭あり五位の殿上人使をつとむ近衛の
 6 無人これにしたがふ御幣など賀茂のりんじの
 7 祭のごとし此りんじの祭は寛和元年正月
 8 十日よりはじめらるかの時使は左衛門權佐藤
 9 原惟成なり第一の御殿は源氏第二は平氏
 10 第三は高階氏第四は大江氏すべて八姓の祖
 11 神にてまします成へし但神躰に神秘有とそ
 (中 一―一オ)
 1 松尾祭 同日
 2 此まつりも貞觀年中にはじまる大寶元年
 3 に秦都理といひし人はじめて神殿をこん
 4 りうしけるとかや大山咋「咋」補入「听神の御事なりと

- 5 うけ給はる叡山の神と同躰にてましくける
- 6 成へし
- 7 杜本祭 同日
- 8 河内國にある神社なり午の日使 たつ仁
- 9 和五年四月に祭 ははじまる
- 10 當麻祭 同日
- 11 やまとの國にあり是も午の日祭 使 たつ
- (中 一二ウ)
- 1 當宗祭 上西日
- 2 是は河内國にあり午日使 たつ杜本當宗は
- 3 ほどちかきゆへに一人の使兩社のまつりのた
- 4 めにげかうす宇多天皇の御外祖父當宗
- 5 氏なるによりて仁和五年四月十四日祭を
- 6 は始行せらる
- 7 梅宮祭 同日
- 8 承和のころより此祭 ははじまる永延以後毎
- 9 年の事にはなりたりその已前はおこなは
- 10 る、ときもありとゞめらる、としも侍りき
- 11 此社は仁明帝の御母堂橋 太後の祖神也
- (中 一三オ)
- 1 承和年中にはじめて御門より祭を奉らる

- 2 橋氏の祖神なるべし是定といひて橋家の
- 3 の人の管領する社にて侍るにや抑此是
- 4 定の一人の家の家につたはりしことは橋
- 5 氏の公卿たえてのち正月五日の叙位に
- 6 氏の爵の事をおこなふへき人なきにより
- 7 寛和の比中の關白道隆大納言と申侍し
- 8 とき宣旨をかうふり給て氏の爵の事を
- 9 申おこなひ侍し也中關白粟田關白御堂關
- 10 白この三人の母は攝津守藤原中正といひし
- 11 人のむすめなりかの中正の室は中納言橋隆
- (中 一三ウ)
- 1 清卿のむすめ也中關白には外祖母也かや
- 2 うの由緒侍るによりて是定は藤氏の家に
- 3 相傳し侍るとかや
- 4 廣瀬龍田祭 四日
- 5 此兩社は和國にあり祭の日は廢務なり
- 6 としに二度おこなはる使は前の日たつ大忌
- 7 風神祭といふは是なり風水の難をのぞき
- 8 て年穀のゆたかなることをいのり申さる
- 9 るにや文武天皇四年四月風神を龍田立
- 10 墅にまつり大忌神を廣瀬河曲にまつる
- 11 と日本紀にみえたり神代卷に伊弉諾尊
- (中 一四オ)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 (中 一四ウ)
 灌佛 八日
 擬階奏 七日
 是は二月の列見のときの成選短冊を二
 省よりもちて参るを大臣のそうもんする
 義なり列見延引のときは是ものぶる也事
 はてぬれば短冊をもとのごとく櫃にいれてか
 きて退出すさしたることはなし
 神事にあたる日はおこなはれず灌佛ある時
 は九日より御神事をはしめらる御殿の母屋
 の御簾をたれて日御座を点じてそのあと
 に山がたをたてたる佛のむまれ給ふ景色を
 つくりて糸にて灌をおとし色とのつくり物
 あり北の方に机をたて、鉢五に五色の水
 をいれらる公卿まいりて殿上にさふらふ女
 房の布施どもいろくむすひたる花
 につけて風流などあるを衣箱のふたに入
 て臺盤所より出さるれば藏人とりて殿上
 の臺盤のうへにをく上達部わが布施のふ
 (中 一五オ)
 なづらみをもちて御殿の長押の上なる白木

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 (中 一五ウ)
 伊勢神衣祭 十四日
 ことを申也
 伊勢神衣祭 十四日
 是は神祇令にのせたり伊勢神宮祭をいふ也
 神服部潔齋して三の赤引の神調のい
 とをもつて神衣ををるまた麻績連といふ
 氏人麻をうみて敷和衣ををりて神明に
 奉るを神衣祭とは申也
 日吉祭 中申日
 このやしろは松尾社と同躰なり長久四
 年六月八日にはしめて二十二社の内に
 くは、り給延久四年四月廿三日に祭をは
 (中 一六オ)
 しめらる
 日吉山王權現と申奉るは大比叡と小比叡との兩社
 ひ叡のやま

3 を申也大比叡大明神は天昭太神の分身なり欽明天皇

4 即位元年にやまとの國しきの上のこほりにあまくたりて大

5 三輪神とあらはれ給ふそのち天智天皇即位元年に老

6 翁の御かたちにて大びるにうつり給ふ今のはしどの大宮權

7 現これなり小比叡大明神と申は國常立尊にておはします

8 日本の地主なりと御たくせんましくける二宮權現これなり

9 この神こゝにあまくだらせ給けるときは三津川の水の色五色の

10 浪をながしけるとそ

(中 一六ウ・一七オ、図絵)

1 賀茂國祭 同日

2 欽明天皇の御宇四月に吉日をえらんでまつ

3 らるゝよし所見ありまた和銅にみことりの

4 ありて山城國司これを檢察すと見えたり

5 今日國祭は賀茂の本祭なるべきにや西日

6 のまつりは公家より使をたてられ走馬をた

7 てまつらるあひかはるべき也

8 關白 賀茂詣 同日

9 初度には日次をえらひてこの事あり天祿二

10 年九月廿六日攝政太政大臣謙徳公伊尹かも

11 まうでの事あり是攝關の人かもまうでの

(中 一八オ)

1 はじめ成へしこの事はかならず賀茂祭の前

2 の日あること也主人は乗車にて地下殿上

3 の前駟あり白和幣神寶唐櫃やうの物を

4 かたげもたさしむ琴持菅笠深沓といふ物を

5 めしくす上達部軒をつらぬ社頭にて神拜

6 あり葵桂を祢宜もちて參れば是をかふりに

7 かく東遊求子するが舞などあり

8 賀茂祭 中西日

9 ひつしの日先上卿陣につきて六府をめし

10 て警固のよしをおほす當日の使は近衛の中

11 少将つとむ檢非違使一条の大路をわたる鉾持

(中 一八ウ)

1 色この物つけさせたりむかし夢の告侍りし

2 より今日人と葵桂のかづらをかくる也賀茂

3 松尾の社司前日よりしかるべき所とへ奉

4 る欽明帝の御宇より祭ははじまる下賀

5 茂御祖上賀茂別雷二乃神祭なり此御

6 祖の神を玉依姫と申す賀茂建角身命

7 のむすめなりある時せみのを川の邊にあそび

8 けるに河上より丹塗の矢一すぢながれくだる

9 玉依姫この矢をとりて我家のやねにさしは

10 さむそれよりしてほどなくはらみて男子をうむ

11 しかれども父をたれともしらざりきある時に

(中 一九オ)

1 はかりことに酒もりをして今の兎に盃をもたせ

- 2 て汝が父にさせとをしへければ児その盃をは虚
 - 3 空になげて家のやねをふみやぶりて我は天
 - 4 神の御子なりとて天上をさしてぞ上りける則
 - 5 別雷 命是なり今の丹塗矢は松尾の大明神
 - 6 とのちにあらはれ給ふにやおよそ神事に大祀
 - 7 中祀少祀と申事あり一月の神事を大
 - 8 祀といふ太嘗 會など也三日のをは中祀といふ
 - 9 いまこの賀茂祭 なども一日の神事をは小
 - 10 祀といふ松尾平野以下諸社の祭 なるへし
- (中 一九ウ・二〇オ、図絵)
- 1 中山祭 同日
 - 2 永承五年六月十六日神社をこんりうして
 - 3 同六年十一月八日に従三位の神位をさづけ奉
 - 4 らる是は冷泉院にまします石神也後冷
 - 5 泉院天喜元年四月よりはじめて官幣あり
 - 6 吉田祭 中子日
 - 7 中納言山蔭卿貞觀のころほひこんりうし給ふ
 - 8 一条院永延元年よりはじめて官幣を奉らせ
 - 9 給ふ春日社と同躰なりならの京のときは春
 - 10 日社 長岡の京のときは大原野いまの平安城
 - 11 のときは吉田社なりみな帝都ちかき所にて
- (中 二一オ)
- 御門をまもり奉らせ給ふにやされば御堂の關白

- 2 の法成寺と吉田社とをあがめ給しことは興福
 - 3 寺と春日社とに思ひよせられけるとそうけ給はる
 - 4 駒牽 廿八日
 - 5 是は四月に侍る事なり八月の名は同じけれ
 - 6 ど心はかはれり天皇武徳殿に幸す玉卿以下
 - 7 床子につく左右の御監御馬奏をとる馬頭庭を
 - 8 わたり御馬をひきわたす白馬の節會のごとし
 - 9 近衛兵衛の射手南にわたり四府騎射の文を
 - 10 そうす左右大将これをそうもんす近衛少将已
 - 11 下番長以上六人東遊をそうす右近衛納藤
- (中 二一ウ)
- 1 利狗犬をそうす雅樂寮藤芳菲駒形をそ
 - 2 うす此こまひきは來月の騎射の馬射手の人
 - 3 などを今日御らんぜらる、けしき也貞觀の
 - 4 ころよりはじめらる小月の時は廿七日也延長
 - 5 五年には五月三日に駒引ありとみえたり
 - 6 新日吉祭 卅日
 - 7 永曆元年十月十六日後白河院日吉の御鉢を
 - 8 東山の新宮にうつし申さるこれを新日吉と
 - 9 いふ應保二年四月卅日はじめて祭あり
 - 10 三枝祭
 - 11 率川祭をいふよし神祇令にのせたり三枝
- (中 二二オ)
- の花をおりて酒樽をかざるゆへに三枝の祭

- 2 とは申なり三枝とかきてこゝにはみくさとよむべしとそやまとの率川のやしろの南にあ
- 3 り又播州に三枝といふ所ありこれをはさいく
- 4 さとよむ混ずべからず此祭もし二月の率
- 5 川祭と同じかるべきかさりながら神社令には
- 6 孟夏の祭の類にのせたれば先そのごとく四
- 7 月の所に申侍るにや率川祭は右大臣是公
- 8 のこんりうと申口傳侍れとおぼつかなき事
- 9 なりそのゆへは令とまうす書は淡海公のえら
- 10 はれて養老年中にそうらんせらる是公大
- 11 (中 二二ウ)
- 1 臣は淡海公の曾孫なりすでに令に率川
- 2 社と侍るなれば是公のはじめてこんりうに
- 3 はあるべからざるにや養老以前にもはやあり
- 4 ける神社なり是公の再興しけるを建立と
- 5 申やらいとおほつかなし
- (中 二三オ)
- 1 五月
- 2 獻二 菖蒲 三日
- 3 六府あやめの興を南殿のはしの東西にたツ又
- 4 時の花をおりそへて同じくをく四日は朝餉の
- 5 庭にこれをたつ主殿寮所に菖蒲をふ
- 6 く天平十九年五月より詔ありて百官諸
- 7 人ことごとく菖蒲の纒をかくべしかけざらん者
- 8 は宮中に入べからずとさだめらる弘仁式にも

- 9 菖蒲艾花など三日の平旦に南殿の前に
- 10 をくとあり
- 11 五日節會
- (中 二三ウ)
- 1 天皇武徳殿に出御なりて宴會をおこなはれ群
- 2 臣に酒をたまふなり内辨なども四節に同じ
- 3 人とみなあやめのかづらをかく日影のかつらのこ
- 4 とし典葉寮あやめのつゝみを奉る群臣葉
- 5 玉をむすふ五色の糸をもつてこれをつくりて臂
- 6 にかくれば悪鬼をはらふと申本文侍るにやそ
- 7 のち騎射のことあり大将射手のそうをと
- 8 る左近衛馬にのりて弓をいる是をむまゆみと
- 9 はいへり推古天皇の御宇よりはしまる今はた
- 10 えていくよにかなりぬらん
- 11 端午節
- (中 二四オ)
- 1 今日粽を食ことむかし高辛氏の悪子五月
- 2 五日に船にのりて海をわたりしとき暴風
- 3 にはかにふきて浪にしづみけるが水神とな
- 4 りてつねに人をなやませりある人五色
- 5 のいとをもて粽をして海中になげ入しか
- 6 は五色の蛟龍となるそれよりして海神
- 7 人をなやまさずこぎゆく舟も災難にあは
- 8 ずと申つたへたり又は屈原が汨羅にし
- 9 づみ魚腹にはうふりしをまつりしときの
- 10 供物なりとも申にや

11 左右近衛馬場騎射さうごんゑのむまばのむまゆみ

(中 二四ウ)

1 五月三日は左近のあらてつがひ四日は右近の

2 あらてつがひ五日は左近のまてつがひ六日は右

3 近のまてつがひなり是をひおりの日といふは

4 まてつがひのとき舎人とも

5 褐うちひきを引おりて

6 きる

7 ほどに

8 ひおりと

9 いふなり

10 あらてつがひも

11 同じ躰なれと

(中 二五オ)

1 それこそ

2 ぎしきばかりなれば

3 まてつがひをひおりとはいふ也

4 一条大宮より西のかたは右近

5 それより東は左近也

6 毎年五月に左右近衛が

7 二度馬にのりて

8 ゆみいかこと也

(中 二五ウ・二六オ、図絵)

1 紫野今宮祭 九日

2 是は疫癘の神なり正暦五年長保二年

3 天下しづかならざりしときこの神社をま

4 つらる藤原長能和哥二首を詠じて奉

5 るとかやその哥後拾遺に待るとそ承る

6 白妙のとよみてくらをとりもちていわひそ

7 そむるむらさきの野に

8 いまよりはあらふる心まします花の都

9 にやしるさためつ

10 この哥ある人の云世の中さはかしう侍りけ

11 れは舟岳の北に今宮といふ神をいわひて

(中 二七オ)

1 大やけも神馬奉り給となんいひ傳へたり

2 有無日 廿五日

3 是は村上天皇の御忌日なり宮中にありなし

4 の日と申にや廢務日にあざれとも政おこな

5 はれ侍らす又急事などあればにはかに政

6 事ありさてありなしの日とは申なり

7 最勝講

8 先かねて日次をさだめらる東大寺興福寺

9 延暦寺園城寺の僧の中に稽古のきこえ

10 ある仁をえらひて論議講師聴衆などあ

11 り最勝王經を清涼殿にて講せらるゝなり

(中 二七ウ)

1 一條院寛弘の比よりはじまるあるひは長保

2 四年よりはじまるとも申也後朱雀院の

3 御ときにや生身の四天王道場に現せさせ給

4 ひけるよりかならず四天王の座をしかれけ

5 一り五日の間のぎしき日ことに同じ結願の
6 日行香の祿あるへし
7 賑給

8 是はいやしき民に米塩などをたまふ也京
9 中の糸里小路をわけて檢非違使うけた
10 まはつてこれをひく米塩の勘文など申事
11 の侍る也大臣陳につきてこれをさだむ

(中 二八オ)

1 欽明天皇の御宇よりはじまる季春月に
2 天子倉廩をひらきて貧窮の者にたまふと
3 いふ事礼記の月令にも侍るにや

着欽政

4 是は檢非違使佐以下東京にて制法を
5 おこなふこと也元明天皇の御宇和銅より
6 はじまる月令の本文には孟夏の月に有べ
7 しと見えたれと四月は歳月にて神事
8 ことしげければ五月にをよぶと也

(中 二八ウ、空白)

(中 二九オ)

1 六月
2 御贖物

3 是は一日より八日までにかけんもちて參る
4 朝餉にて主上に參らす四のかはらけを御指し
5 て上にはりたる紙に穴をあけて御いきをい
6 る、なり弘仁五年六月より御薬の事によ
7 りてはじめて御贖物を奉る大かたは素戔

8 鳴尊の千座置戸の祓などいふよりおこる事也
9 供二忌火御飯 同日
10 内膳司より奉れるを大床子の御座にて供ず
11 るなり景行天皇の御ときよりはじまる忌火と

(中 二九ウ)

1 火をいむこと也神事などの時は不淨の
2 火をうちかふることにやは月次の神今
3 食の御神事を今日よりはしめらる、成へし
4 供二醴酒 同日

5 一夜を経たる竹葉の酒なればひとよざけとは申
6 なりこざけとも式文に侍りむかしは口の中に
7 米をかみて宿をへて酒につくりけるにや造酒
8 司今日より七月卅日まで毎日に奉るなり
9 應神天皇の御時よりはじまるおよそ酒をつく
10 ることもこの時百濟の人わたりてつくり初たり
11 是より前には酒といふ物なしと申人侍れと

(中 三〇オ)

1 神代に素戔鳥「マ」尊稲田媛のために大蛇をころさ
2 れしとき八しぼりの酒をつくりたること日本
3 紀に見えたり然れば酒といふことは神代より
4 有へきにごそ
5 延暦寺六月會 四日

6 是は傳教大師の忌日なり勅使登山の儀あ
7 り延暦寺とは延暦年中につくられ侍しかは
8 年号につきて名をえたり

(中 三〇ウ・三一オ 図絵)

(中 三二ウ)

御躰 御卜 十日

神祇官 人一日より本官にこもりて是をうらな

ふ上 卿今日参りて内侍につきてそうもんす

主上 の玉 躰に御つゝしみあらんことをうらなひ

そうする儀也白鳳四年に始行 せらる

月次 祭 十一日

是は先神今食以前上 卿神祇官の北門の

内東 の脇につきて供神物の具否をたつ

ぬ次に廳につきて事をおこなふ神祇官 掌

祝詞と師説の座につく本官 人みな木綿

をつけたり上 卿壇下の薦座にきて御

(甲 三二オ)

座幣物を見る儀あり是は六月十二月

二度諸社へ御幣を奉らせ給ふ事也弘仁

年中に此事はしまる

神今食 同日

御神事一日よりはじまる行 幸あり成の

はじめに出 御先大忌の御湯をめすうらにあ

ひたる上 卿陣につきて辨をめてして諸

司の具否をとふ小忌御燈を供ずもの火

をけちてともしあらたむ上 卿宰相 中納

言外記史うらにあひたる人小忌をきる近衛

司藏人みなきるへし行 幸のとき御輿は

(中 三二ウ)

菖花なり鈴の奏なし八省 中和院に行

幸ありて神嘉殿の大床 子の御座につか

せ給御湯の、ち采女ときを申亥 内侍髪

あげて神殿にまいりて寝具を供ず是

よりさき左右近 司殿の東西に陣をひく開

門圍司などはて、上 卿已下神殿の前に列

立左右近 中将をのゝ一人す、みて靴を

ぬぎ弓箭ときて南戸の左右の帳をか

くうちはらひの箱坂枕 八重畳 など上 卿

参議辨少納言外記史次第に是を供ず内

へとり入ぬれば掃部頭まいりて神座をし

(甲 三二オ)

く南 枕 にしく先一丈二尺の畳 その上に六

尺の畳 四帖まくらの方二帖はうらありその

上に九尺の畳 七帖その上に八重畳 しく九

尺の中一帖をいさ、か東に引出 てうちはら

ひの箱を、く坂枕に八重畳 の下枕にしく

内侍まいりて御衾を八重畳の上に奉る御

櫛御扇 そばにをく御沓御あとにをく也内侍

しりぞひて神殿に入御あり神座の東に

たツみむきに半畳をしきて御座とす主上

御面を正してつかせ給此間の儀は人しらぬ

11 こと、も也御すこもなどしきて神饌供ぜら
(中 三三ウ)

1 る、儀あり白酒黒酒参りてもとかしはに
2 てそ、くなくあいの御飯御酒参りぬれは
3 宮主祝 申す御手水は事はじまらぬさき
4 と事はて、と二度あり大かたは、大嘗會
5 の神饌の儀に同し丑一にまたあかつきの
6 御膳まいる前のごとし神祇官にておこな
7 はる、おりは先官 廳へ行幸なりて帛の
8 御装束奉りて神祇官へ行幸あるなり
9 神饌のほどは近衛府の幄にて神樂あり
10 よゐのほどとりもの韓神まてうたふよも
11 すがらうたふて還御

(中 三四オ)

1 この御神事は一日より十一日にいたる十二
2 日の朝解齋なり真實に御みづからの潔齋
3 は十日よりあるなり伊勢天照太神をくはん
4 じやう申されて天子御みづから神饌を供
5 ぜさせ給ふとそ靈龜二年六月よりはじま
6 れり月次といへば毎月のやうなれともしからす
7 二季の月次とて六月と十二月とはかりた、
8 二度ありとしるへし
9 供二解齋 御粥一 十二日
10 神今食の次の朝解祭の御粥参る昼御
11 座の大床 子にて臺盤一脚をたて、供す

(中 三四ウ)

1 御粥土器にもるめの御しるものそへたり三口
2 めして御箸を立潔齋の御手水は御手水の
3 間の畳をとりあげて大床 子を北にたて南向
4 に御手水の具を、きて御手水の儀あり次に
5 案にをきたる御うらなしをとりてめして巽
6 にむきて三足あゆませ給神今食はて、後
7 十二日に解齋あるは中比よりの事にや
8 解齋の御粥などを供じては神齋は有べから
9 ざるか本式にて侍へし
10 祇園御霊會 十四日
11 此まつりの日禁中はことなる事なし馬長

(中 三五オ)

1 などともよをしつかはさるれとも御覽はなし
2 祇園社 は貞觀 十一年にたくせんのことあり
3 て山城 國にうつし奉りしにや素戔嗚尊
4 の御わらんべにては「は補△牛頭天王とも武塔天神
5 とも申也むかし武塔天神南海の女子をよ
6 ばひにいでますときに日暮路邊に宿をかり給
7 ふかの所に蘇民將來 巨旦將 來といふ二人の者
8 あり兄弟にて有しが兄はまどしく弟 はと
9 めりこ、に天神宿を弟の將來にかり給ふに
10 ゆるし奉らす兄の蘇民にかり給ふすなはちか
11 し奉り粟がらを座として粟飯を獻るその

(中 三五ウ)

11 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 11 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 10 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 9 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 8 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 7 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 6 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 5 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 4 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 3 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 2 (中 三六ウ・三七オ、図絵)
 1 (中 三六ウ・三七オ、図絵)

のち八年をへて武塔天神八はしらの御子を
 ひきぐしてかの兄の蘇民が家にわたり給て
 一夜の宿をかしつることをよるこひ給て恩をほう
 ぜんとして蘇民に茅輪をさづくへしとのたま
 ひてその夜より天下に疫癘おこりて人民死
 すること数しらずそのときた、蘇民ばかりのこ
 りけり後に武塔天神我は速須佐雄能神也
 とのたまふ今より後にも疫癘の天下におこら
 むときは蘇民將來の子孫なりといひて茅輪
 をかけば此災難をのがれんとのたまひけるにや
 又祇園の縁起にのせていはく天竺より北に
 (中 三六オ)
 1 國あり九相となづくその中に園あり吉祥と
 2 いふその中に城あり城に王あり牛頭天王と
 3 なづく又は武塔天神とまうす沙羯羅龍王の娘
 4 を后として八王子をうみ給へり八万四千六百五十
 5 四神の眷属ありといへり御霊會のとき四条
 6 京極にて粟の御飯を奉るは蘇民將來が由
 7 緒とぞうけ給はる
 8 祇園三社は牛頭天王または武塔天神とも申是は
 9 すさのおのみこと也第二は婆利塞女是は稲田媛とも申
 10 または婆羯羅龍王のむすめ也ともいへり第三は蛇毒鬼神
 11 是はやまたの大蛇なりとそ

11 (中 三八ウ)
 11 (中 三八ウ)
 10 (中 三八ウ)
 9 (中 三八ウ)
 8 (中 三八ウ)
 7 (中 三八ウ)
 6 (中 三八ウ)
 5 (中 三八ウ)
 4 (中 三八ウ)
 3 (中 三八ウ)
 2 (中 三八ウ)
 1 (中 三八ウ)

11 同臨時祭 十五日
 10 御禊などの儀大かたは平野に同し使は殿上五
 9 位なり東遊を奉らる宣命あり天治元年
 8 六月よりはじまるまた今日走馬勅樂など
 7 あり天延二年の東遊の哥に云
 6 神の代の八坂の里と今日よりは君かちとせ
 5 はかそへはしむる八坂とは今の祇園なり山城國
 4 愛宕郡八坂郷といふ所に神社をつくられたる
 3 ゆへなり
 2 節折 卅日
 1 晦日の夜御贖物まいる荒世和世の御装 東二間
 (中 三八オ)
 11 節折の命 婦竹をもちて参りて御たけより
 10 はじめて所との寸法をとりはて、宮主にきり
 9 あてがはせて御祓をつとむる也あらたへにこたへ
 8 とて二度あり二度はて、祿をたまふ節折をは
 7 よおりといふ竹にて御たけの寸法をとりて其
 6 ほとに折あてがへば也
 5 大祓 同日
 4 大祓 同日
 3 大祓 同日
 2 大祓 同日
 1 大祓 同日

3 大はらへといふは百官 ことごとく朱雀 門にあつ
 4 まりてはらへをし侍る也六月十二月二度也
 5 天武天皇の御時よりはじまる解除は觸穢な
 6 どのときもあり神事をおこなふときは臨時
 7 にも常にあれどもこの祓は百官一同にあつまり
 8 て祓をする也又今日は家々に輪をこゆること有
 9 みなつきの名こしのはらへする人はちとせの
 10 いのちのふといふなり此哥をとなふるとそ申つた
 11 へ侍る然るに法性寺關白の記には
 (中 三九才)

1 思ふことみなつきねとて
 2 あさの葉を
 3 きりにきりても
 4 はらへ
 5 つるかな
 6 此哥を詠へし
 7 と見えたり
 (中 三九ウ、図絵)

1 (中 四〇才)
 2 鎮火祭 同日
 3 この祭禮の間 秘術 おほく侍るよし承るなり
 4 卜部氏の人火をうちて宮城の四のすみにて
 5 まつることあり火災をふせかんのためとなり
 6 道饗祭 同日
 7 疫神の祭 なり毎年 かならずおこなはるへ
 8 き事也 ちか比はたえて侍るにや卜部の
 9 人京城の四角の路にて鬼魅の他方より

9 来るを京洛に入ざらしめんために路上に供
 10 物をそなへてまつるなり鎮火道饗のまつ
 11 りをは四角四堺の祭とも申也
 (中 四〇ウ)

1 施米
 2 東山西北山などいふ所の山寺に侍るたつ
 3 ぎなき法師原に米塩をほどこさるゝ事也
 4 上卿陣につきて人数の勘文をそうもんす
 5 五月の賑給六月の施米はみな貧窮獨
 6 の者に米をたまふなりまことに有かたき事
 7 にこそ
 8 雷鳴陣
 9 この事あなち年中行事には入侍らす
 10 月令の文に春分に雷聲を發し秋分に
 11 雷聲をおさむとあり然らば夏さかりに鳴
 (中 四一才)

1 へしと見えたり是によりてこゝに夏のお
 2 はりに一筆しるしくはへ侍るなりそのうへ
 3 すでに西宮抄には六月の所にのせたればう
 4 たがひなきにや抑雷鳴陣とはむかし雷の
 5 こゑみたひたかくなり侍れば大将以下近
 6 衛の次將 まで弓箭を帯して御前の孫庇
 7 に候して御門を守護し奉りし也將 監以
 8 下はみな蓑笠をきておなじく南殿の前の庭
 9 に侍る是を雷鳴陣とは申也内裏の襲芳

10 舍をば雷かんなりのつば 壺かとも申いかにや雷いかつち のことと、まれば
11 また陣ちんをとく儀式きしきあり延喜えんぎの御宇ぎょうに

(中 四一ウ)
1 清涼せいりやう殿でんの霹靂へきれきとておそろしき例ためしも侍るゆ
2 へにや

(中 四二オ)
1 七月
2 廣瀬立田祭ひろせ たつたのまつり 四日

3 四月におなしかさねてしるすにをよはす

4 七日御節供ごせつご

5 内膳司うちぜんしよりこれを調進てうしんす今日索餅さくへいをもち

6 ゆることゆへある事にやむかし高辛かうしん氏の小子せうし

7 七月七日に死たりその靈りやう鬼おにとなりて人に

8 瘡病さやへいをいたすその存日ぞんじつに麦餅むぎもちをこのみしがゆ

9 へに今日索餅さくへいをもてこれをまつれば年中ねんぢゆうの

10 瘡病さやへいをのぞくといへり

11 乞巧きつかう奠でん 七日

(中 四二ウ)

1 先七日まづになれば藏人くらんど御調度ごてうどをはらふ夜よに入て

2 乞巧きつかう奠でんあり御殿ごでんの庭にわに机つくへ 四をたて、燈臺とうだい九

3 本ほんをのく燈ともしび あり机つくへ の上うへにいろくくの物ものすへ

4 たり箏しやう 柱しらう たて、をけり机つくへ の上うへの火ひとりによも

5 すから空そらだきものあり柱しらう に三さんの様やうありつねは盤ばん

6 涉調しきでう半呂半律はんりよはんりつ秋あきの調しらべなり是こゝは秘事ひじにて

7 侍るゆへにしる人ひとすくなし觸穢しよくそのときも猶なほ

8 おこなはる天平てんぴやう 勝寶せうほう七年にはしまるおよそ
9 今日けふは牽牛けんぎう織女しよくちよの二星せいせいあひあふ夜よ也う鳥

10 鶴つばき 天河たなにきたりて翅つばさをならべ橋はしとなして織たな
11 女ををわたすよし淮南子わいなんじと申書しよに見えたり

(中 四三オ)
1 又續しよくさい 齊諧さいかい記きにいはいく桂陽城けいやうじやう の武丁ぶてい仙道せんだうあ
2 りその弟おと、にかたりて云七月七日のよ織しよくちよ 女河ぢよかは
3 をわたりて牽牛けんぎうにいたる世人よにいたりて

4 織女しよくちよ 牽牛けんぎうに嫁かすといふは是也しよ乞巧きつかうといふ

5 こと唐もろこし より事ことおこれり七夕祭たなばたまつり ともいふなり

6 香花かうげをそなへ供具くぐをと、のへて庭上ていじやう に文ていを、き

7 竿さのはしに五色ごしきの糸いとをかけて一事じをいのるに

8 三年みしせの中なかにかならずかなふといへりこのゆへに

9 乞巧きつかうと申まを也なり 赫隆かくりゆうは腹中ふくちゆうの書しよをさらし阮咸げんかん

10 は竿上かんじやう に棍こんをたむけしためしも侍るにや

(中 四三ウ、四四オ、四四ウ)

(中 四四ウ)

1 文殊會もんじゆゑ 八日

2 是こゝは東寺とうじ西寺さいじにておこなはる仁明にみやう 天皇てんわう天長てんぢやう

3 十年七月に大法師たいほつし泰善たいぜんはじめておこなはる

4 毎年七月にこの會あひあるべきよし格かくにさだめ

5 らる

6 盂蘭盆うらんぼん 十四日

7 内藏くわう寮らう 御盆ごぼん供くをそなふ昼ひる御座ござの南みなみの間に

8 菅すげの圓座えんざ一枚まいをしきて主上しゆじやう こゝにて御拜ごはい

9 あり幼主のときはなし天平 五年七月にはし
めて孟蘭盆を大 膳職 にそなふと見えたり
10 孟蘭盆は梵語なり倒懸救器と翻譯す

(中 四五才)

1 倒懸はさかさまにかゝると云心也餓鬼の苦をお
2 もふにさかさまにかげられたらんがごとし救器
3 はこの餓鬼の苦をすくふ器 なり佛弟子目連
4 はじめて六道をみてその母の在所を見るにがき
5 の中に有しかは是をかなしひてすなはち釋尊に
6 まうで、此苦をすくはんことをとめしかは七月十
7 五日に自恣の僧を供養せは解脱をえんとの
8 たまひしよし孟蘭盆經 にみえたりむかし齋明
9 帝の御ときは飛鳥寺にして須弥山の形をつく
10 り孟蘭盆會をまうけられけるとかや惣じて諸
11 寺にておこなはるゝこと成へし

(中 四五才)
相撲節會

1 是は諸國の供御人をめしあつめて七月相撲
2 節といひて天子の御覽あること也先十六七日の
3 間、にめしおほせあり上 卿勅をうけたまはりて
4 左右の次將 に相撲あるへきよしをめしおほせら
5 せらる左右の近衛方を分て國とへ使を下して
6 相撲をめす是を万葉にはことりづがひと申也廿
7 六日に内取といふことあり主上 仁壽殿に出 御なる
8 廿八日に召合 あり天皇南殿に出 御なる左右の相

10 撲人 犢鼻の上に狩衣袴 をきて一とに相撲をと
11 りて勝負あり王卿參上 す大將 相撲の奏を

(中 四六才)

1 とる十七番とりて勝の方乱聲 す又廿九日に
2 抜出 とて相撲をすぐりて御覽ぜらるゝ也神龜
3 三年に初而諸國よりめしのぼせらる寛平七年には
4 童 相撲を御覽ありきすべて相撲のおこりを申に
5 日本紀垂仁天皇 七年七月に當麻の村に勇 士有
6 名を當麻蹶速といふ力 つよきこと角をも裂つべし
7 天皇此よしを聞 召て是につがふへき人を群臣に尋
8 られしかは出雲國にたけきおのこあり野見宿禰と
9 申侍るよしを奏す則 是をめて相撲を御らんぜら
10 る、野見宿禰からやまさりけん蹶速が腰をう
11 ちくじきて立所 にふみ殺され侍りき是相撲の初ならんかし

(中 四六ウ、四七才、図繪)

(中 四七ウ)

1 祈年穀奉幣
2 是は年穀をいのらんかために二十二社に幣
3 を奉らる二月と七月と二度ありくはしき
4 事は前にしるし畢
5 仁王會
6 是も春の所にあり

(以上、中卷)

(広島大学日本語史研究会会員)